

MOCHIZUKI OUTDOOR TOOLS

BACKCOUNTRY RESEARCH

WINTER 2023/2024

MOCHIZUKI OUTDOOR TOOLS

BACKCOUNTRY RESEARCH

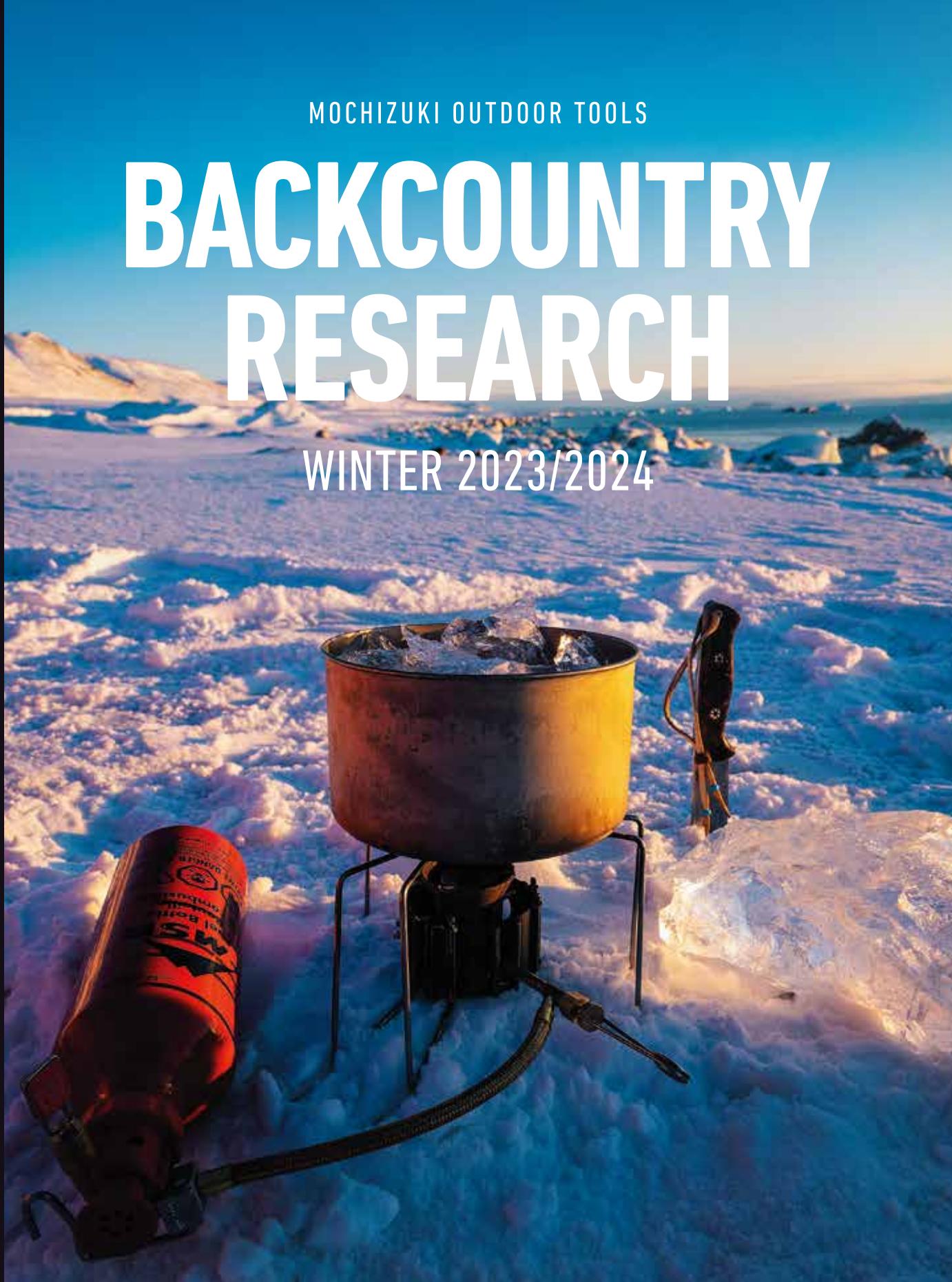
WINTER 2023/2024

backcountry-research.jp



Mochizuki Outdoor Tools 〒955-0093 新潟県三条市下須頃323番地 TEL.0256-32-0819(代) FAX.0256-32-0880 www.e-mot.co.jp
株式会社モチヅキ ユーザーサポートダイヤルTEL.0256-32-0860 受付時間:平日午前9時30分から午後5時30分まで E-mail info@e-mot.co.jp

このカタログに記載されている商品の仕様、デザイン、価格等は、予告なく変更する場合があります。商品の写真は印刷物のため実際のカラーとは若干異なることがあります。



MOCHZUKI OUTDOOR TOOLS

BACKCOUNTRY RESEARCH WINTER 2023/2024

CONTENTS

- 04 — 極限の獵師めし
- 10 — 冒険家が頼りにするには理由がある
Interview with 萩田泰永・栗秋正寿
- 20 — 液体燃料ストーブ ガイド
- 22 — 液体燃料ストーブ 点火の儀式
- 23 — 北国在住「灯油」愛用者からのレコメンド
- 24 — 液体燃料ストーブはメンテナンスが重要
- 26 — 白い森を歩く
スノーシューリングで体現する優しい日常
- 32 — MSR Backcountry Tour in Hakuba
ゲストが体験したフィールドでのギア比較
- 38 — TOOL TOPICS #1
洗濯必須なテクニカルアウターウェアの新時代
- 40 — TOOL TOPICS #2
- 42 — スノーボーディングとマウンテンニアリングの境界線

ABOUT

MSRをはじめとする多くのアウトドアギアを取り扱うメーカー「モチヅキ」から発信する、ギア・レポート・メディアです。バックカントリーでの実践から生まれた、信頼に足るフィードバックをお届けします。ウィンターバージョンの紙メディアでは、雪上や極寒地といった厳しい環境下に身を置く屈強なフィールドプレイヤーたちの体験談と、それを支えるギアの特性などを掲載し、二次元バーコードによってWEBサイトとリンクしています。紙とWEB、双方の特性を活かした多角的な情報を楽しんでください。

WEBSITE

backcountry-research.jp



表紙写真 / 遠藤 励

コンテンツページ写真 / 太田孝則

STORY 01

極限の獵師めし

文・写真 / 遠藤 効

北極地方における先住民の暮らしに寄り添い、
変わりゆくその現状を写真に収め続けてきた
写真家・遠藤 効によるドキュメント。



ドラゴンフライに火を灯す儀式は 大地からいただいた獣の魂と自然界への感謝をも内包する

どちらかと言えばアーヴォック(セイウチ)は背脂と血合いが強めの豚肉。ウカル(北極ウサギ)は濃厚で上質な鶏肉みたいた。ウミマック(ジャコウ牛)はまんま牛肉だな。ナノ(白熊)は…ナノ。オッホ(脂身)が強めで獣臭いから基本は塩茹で。アッパリヤホ(春の渡り鳥)の塩茹では濃厚で絶品、蟹を剥いて食べている感覚に近い。アケヒョ(北極ライチョウ)は甘みが強く、獲れたてなら羽をむしって生で。ブイシ(アザラシ)も血合肉で足がはやいから新鮮に限る。エスキモー流ならオッホや目玉は生で。…でも自分はやっぱりマータック(イッカクの表皮)が一番うまいなあ。

北極地方を先住民と生活するくらいまで掘り下げていくと、「それ食べて大丈夫なの?」と考えさせられるような様々な獵師めしにありつくこととなる。先住民は周囲に生息するほとんどの動物を茹でるか生で食べてしまうが、他にも獲物を石積みで覆い(白熊に奪われぬよう)、野外で半年ほど発酵させたキビヤックやイヒュアンナなどの伝統食はさらに奥深い味わいを持っていた。旅の目的は様々だが、自分にとって世界の「食」は外せない興味のひとつ。その土地の気候や風土を連想しながらいただく現地の食事は、腹も満たされるが、言葉を超えた共有感や文化への理解、思い出までも永続的に満たしてくれる。私が訪れるのは僻地であつたりすることも多いため、食料の確保は常に課題となることから旅の装備には長年愛用しているフューエルストーブのドラゴンフライとチタン製のクッカーが欠かせない。理由は地球上で行くことのできるほとんどの場所、あるいは中継地での燃料入手が可能だということや、ガスに比べて極寒地での火力が安定している点にある。自分はドラゴンフライの燃料として入手が容易なガソリンを使用しているが、これまでの北極圏の遠征でも問題なく使用してきた。ポンピングに始まり、プレヒート着火はファイヤースターターで

おこなう。煙をモクモクさせながら炎が安定するまでのひと時が好きで、長年繰り返しているとそれら一連のアナログ作業がまるで辺境地でおこなう儀式のようにも思える。

今回も初冬のグリーンランドへ愛用のドラゴンフライを持参し、先住民と一緒に狩った獲物の調理に活用した。10月中旬といえどそこは日中マイナス15℃を余裕で下回り、風速40mを越えるほど荒れ狂った吹雪が数日続くこともあった。現地では秋のストームと呼んでいたが、冬の到来を告げるこのストームが静まると、夏の間さらに北上していたセイウチが戻ってくるという。私と友人のカユアングアは、嵐の過ぎた翌日に狩りのため小型ボートに乗って沖合へ向かった。彼は近代化の影響で廃村になってしまった故郷へ戻り狩猟をしながら暮らしている先住民で、電気も水もないその村にたった一人で自給自足に近い生活をしている珍しい存在だ。訪れたこの時期は日中の太陽は水平線から顔を覗かず程度で、周囲は間もなく海氷に閉ざされる。そうなれば移動手段は犬ぞりしかなく、海氷の厚みが安定する極夜の月明かりまでは犬を走らせられないため、数ヶ月を乗り切るために食料を海氷が張る前に蓄えておかなければならぬのだ。狩りの初日は嵐の名残で薄黒い雲が空を覆い、小波の立つ海面を見張りながら数時間ほど獲物を探したが、アザラシ一匹見かけることはできなかった。

狩り3日目、この日も集落から東の沖合へと進むボートの上から壮大な景色を私は静かに眺めていた。本当にセイウチは現れるのだろうか? 静かに過ぎる時の中でそんな思いがよぎり始めたとき、カユアングアがボートを急旋回させながら大声で叫んだ「アーヴォック! アーヴォック!」。遠く離れた海面に浮かび上がる黒い影を私が視界に捉えるまでの間に彼はライフルを取り出し弾を込めようとしていた。わずか1分たらずの出来事だったと思う。セイウチまでの距離を20メートルほどまでに詰め寄ると乾いた銃声が海上に鳴り



響いた。弾を撃ち込まれたセイウチは水中へと消え、あたりは静まり返った。「逃げられたのか?」私は一瞬そう思ったが、その巨体が再び水面へ現れると今度は殺気だった様子で牙をギラつかせながらこちらに向かってきた。北極先住民はセイウチをもっとも危険な生物、海の猛獣として恐れている。アザラシを食べたり、人間や白熊でさえも襲うため絶対に近づいてはならない。カユアングアは続けざまにライフルの弾を打ち込んだ。ライフルとハンドルを交互に操り、上手に間合いを取りながら発砲する。そしてセイウチが弱った頃合いを狙って素早くボートを横付けすると、今度はウキを結んだモリを打ち込んだ。続けざまに至近距離から頭に一発……静かに獲物を見守っていたカユアングアが口を開いた。

「ナマット(もう大丈夫)」と。仰向けに動かなくなったその大きな巨体はゴツゴツの表皮に覆われ、まるで太古の恐竜そのものに見えた。北極地方を最初に訪れた頃(2018年からプロジェクト開始)、私は動物の命を奪う狩猟の在り方や血だらけの解体作業を目の当たりにし、複雑な気持ちでいっぱいになった。だがこれが「命をいただく」ということで、普段の我々がいかに都合のいい部分だけを見て暮らしているかに気づかされたのだ。射止めたセイウチをボートで牽引しながら数時間かけて村まで持ち帰ると今度は1トン以上あるその巨体の引き揚げと解体作業が始まる。通常は集落の人々が集まっておこなうが、ここにはカユアングアと私しかおらず、二人で深夜までかけて解体することとなった。



カユアングアとの出会いは、まだ彼が仕事をもとめて別の村に暮らしていた2018年の旅だった。人目を凌いで村のはずれでテント生活をしていた私のところに突然犬ぞりで現れた。「おまえ、そりに乗せていいってやるから俺の釣り場（海氷にテントを張っている漁場）に遊びに来いよ」。それはすべての勝手が違う民族コミュニティの中でひとり、冒險を続けながら不安な日々を過ごしていたときのことだった。彼も彼で、仕事とはいえ実は魚が嫌いで、村の目まぐるしい近代化と人々の入れ替わりに疲れている様子が見受けられた。一緒に過ごした中でなんとなく波長も合ったので、そのとき以来、私は彼を訪ねている。グリーンランドにおける先住民の暮らしは激動の最中にいる。数十年前までほとんどの獵師たちが自給自足に近い生活を送っていたが、消費マーケットの定着でそのバランスは大きく変わった。食卓には輸入食品が次々と並ぶようになり、動物の毛皮から作った衣服や靴も現在はナイロンや既製品へと代わり、私がこの地方へ通い続けている間にスマートフォンが急速に普及すると、彼らもSNSやネット観覧の虜になった。この地に訪れるまで私が頭に描いていた北極先住民の原始的な狩猟生活は既に過去のものに変わり、人々は次のステージで歩み出していた。伝統的におこなわれてきたイッカク猟や白熊狩りは現在も続けられているが、それら絶滅が危惧されている北極動物の頭骨や爪、角や毛皮なども、装飾品として外部のコレクターが買い求めるマーケットが確立している。

あくる日、私たちはシーズン最初のセイウチをその大きな心臓から塩茹でにしていただいた。この食事に至るまでの過程を静かに回想しながら、その深い味わいの中で、私は命をわけてくれたセイウチの魂と自然に感謝を伝えた。

遠藤 力（えんどう つとむ）：1978年生まれ。長野県大町市出身の写真家。スノーボードカルチャーに精通し、90年代より世界の雪山やコミュニティを訪れその潮流を撮影。近年はアーティストとして雪の作品表現に尽力し、北極圏に通い続けながら失われつつある自然環境や先住民族の暮らしをカメラに収めている。その集大成となる作品集『MIAGGOORTOQ（ミアゴート）』が12月にリリース予定。現在この北極圏プロジェクトの一連の活動支援を募るクラウドファンディングが公開中。





Yasunaga Ogita



Masatoshi Kuriaki

冒険家が頼りにするには理由がある

Interview with

荻田泰永 栗秋正寿

文 / 寺倉 力・写真 / 大社優子

20年にわたって徒歩による極地冒険行を敢行した「北極冒険家」と
同じく20年もの間、真冬のアラスカ三山への挑戦を繰り返した「冬季デナリ登山家」。

世界的にも高い評価の高いリスクな単独行の数々を支えたのは

MSRの液体燃料ストーブだった。シンプルで、堅牢で、故障知らず。

いずれも「植村直己冒険賞」を受賞したリアルな冒険家二人が、そのタフな使い心地を語ります。

ポンプは必ず胸の内ポケットで運ぶ

萩田泰永は、主に北極圏を中心に単独徒歩による極地冒険をおこなってきたスペシャリストである。人呼んで「北極冒険家」。途中のデボや外部からのサポートなしで北極点を目指す「北極点無補給単独徒歩到達」の挑戦や、日本人初の「南極点無補給単独徒歩到達」達成など、20年間で16回という極地冒険キャリアは、世界でも有数である。

1回の遠征は平均50日前後。人力とノンサポートにこだわり、必要な装備、食料、燃料のすべてをFRP製のソリに載せ、自力で引いて前進を続けるのが萩田のスタイルだ。周囲500km圏内に人間が皆無という途方もない大氷原で、100kgを超える荷物を積んだソリを引き、巨大なホッキョクグマに怯えながらも、たった一人で歩みを続けてきた。

そんな萩田が頼りにしているのが、MSRの液体燃料ストーブ「ドラゴンフライ」である。

毎日の炊事はもちろん、雪を溶かして水を作り、濡れた衣類や小物を乾かしたりと多目的に活躍する。この唯一の熱源が失われてしまえば食事が取れないだけでなく、水を飲むことすらできなくなる。つまりは冒険行からの撤退どころか、命の危機にも直結する事態に陥ってしまうのだ。それゆえ冒険者にとってストーブ選びは想像以上に重要だ。

機種の選択に際しては、登山では人気のカートリッジ式ガスストーブが最初に外れる。平均でマイナス30℃、寒いときで

マイナス50℃を下回るという極地の低温下ではガスが気化しにくいため、使い物にならないからだ。したがって、選択肢は液体燃料ストーブに絞られる。

萩田がMSRの液体燃料ストーブに出会ったのは、北極圏に通うようになった4年目の2003年のことだった。冒険の出発地点であるカナダ北極圏の村、ケンブリッジベイで、たまたま著名な冒険家のマイク・ホーンと会ったときのこと。

「『お前はどんなストーブを使っているんだ?』というから、コレだと見せたら、『なんでそんなもの使っているんだ?』と半ば呆れられたのです。そのときマイク・ホーンはMSRのウイスパー ライトを使っていたと思うのですが、彼は遠征中は毎日自身の近くで使う道具だからと、事前にストーブの燃焼実験をして、燃費や、自分が吸い込む燃焼中の有害物質発生の有無まで調べたといいます。その上で、燃費がよくてクリーンなMSRを選んだと。超一流の冒険家はそこまで徹底するんだなど、すごくインパクトがありました」

当初の萩田は、自身を北極に誘った先輩冒険家に習って、先輩が使っていたガソリンストーブと同型のものを、特に考えることなく使っていた。だが、マイク・ホーンの話をきっかけに、北極に集まつくる世界中の極地冒険家たちのほとんどが、MSRの液体燃料ストーブを使っていることに気がついた。以来、萩田はMSR一択になる。

「それからはMSRのいろいろなモデルを試してみました。そうしたなかで、トロ火が使える火力調整が便利だったこともあって最終的にドラゴンフライに落ち着きました。たしかMSRの本国サイトでは『遠征には不向き』的なことが書かれていたと思いますが、おそらく、火力調節のバーツが増えるぶん、故障のリスクが高くなるという理由だと思います。とはいえていると便利だし、馴染んでくる。それから15年になりますが、故障やトラブルは一切ありません」

ドラゴンフライは燃料用バルブとは別に、火力調整の専用バルブを設けることで、トロ火から最大火力まで、火力を自在にコントロールできることが最大の特徴だ。トロ火を使えることで煮物や鍋ものなど料理の幅は格段に広がる。だが、それ以上に極地で必要な機能なのだと萩田は言う。

「要はストーブをどう使うかなんですが、雪を溶かして水を作ったり、料理を作るだけでなく、濡れたアウターウェアやグローブなどを乾かすことにも使いたい。そのため、食事を終えたらクッカーを下ろし、弱火にして、日記を書きながらモノを乾かす。テント内がほんのり温まっていればいいので、トロ火で十分。そこで火力を弱められなければ燃料を余計に消費してしまいますからね。そういうトータルの使い方という意味で、火力調整機能はメリットが大きいのです。もちろん、テント内での火器使用は基本的にNGですが、極地でそれをしなければ長期の冒険行なんてあり得ないので、そこは自己責任ということでご理解ください」

ホワイトガソリン以外にも、無鉛ガソリン、灯油、軽油、ジェット燃料が使えるマルチフューエルタイプのドラゴンフライは、選択肢が限られる辺境地での燃料入手にも対応している。だが、萩田はホワイトガソリン以外は使ったことがないという。なぜなら、北極圏のイヌイットの村では、狩猟の際など日常的にツーバーナーなどを使うため、どこでも良質のホワイトガソリンが入手できるのだそうだ。

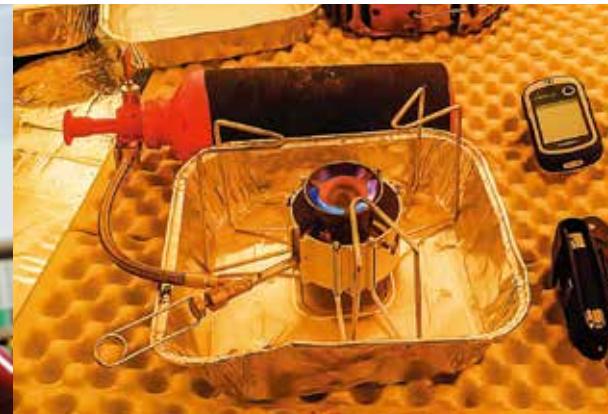
また、おそらく、それが理由だと考えられるが、基本的には遠征中にメンテナンスしたことがない、とも萩田は言う。

「遠征中、基本的にはメンテナンスなしで毎日使い続けてもほぼ問題はありませんでした。ただ、人からもらった使い古しの燃料缶をそのまま使ったときに不具合が生じて、分解して掃除したら直ったという経験があります。缶のなかに残っていた別の燃料が混じったんでしょうね。メンテナンスしたのは、唯一そのときくらいです」

萩田が人一倍気を遣っているのは、ドラゴンフライ本体よりも、フューエルポンプのほうである。燃料ボトルに直接ねじ込んで、ポンピングで圧をかける重要なインターフェイス。だが、本体が樹脂製で、ゴム製Oリングを多用していることで、低温下の影響を受けやすい。そこで萩田は毎日2個のフューエルポンプをローテーションし、常にどちらか一方は凍らないよう保温することが日課になっている。



左:1日の燃料消費量は平均で350ml。50日の遠征なら1ガロン入りのシェリカン3個と、燃料の入った30ozボトルを2、3本持つ。右:スーパーで買った5枚で1ドルのアルミ箔トレーは超軽量で、燃料もれや炊事時の吹きこぼれにも便利。燃料ボトルには滑り止めのグリップテープを巻いてある。これも「危機的状況」を経験してからの工夫。



左:「遠征中はフューエルポンプを凍らせないこと」と萩田。2つのフューエルポンプをローテーションして使い、1つは凍らないよう保温している。右:「冒険研究所書店」にディスプレイされた遠征用品。丈夫なステンレスクッカーにはヒートエクスチェンジャーを装着し、移動中はクッカー内にドラゴンフライをスタッキングしている。



「キンキンに冷えたフューエルポンプは、カップがカチカチになっているから圧がかからないし、Oリングから燃料漏れが発生するわけです。そこから事故になった実例もあります。なので、行動中はポンプをジップロックに入れて胸の内ポケットで温めておき、テントに入ったときに取りだして燃料タンクに取り付ける。これは自分に限らず、極地遠征の世界では常識です。日本の冬山ではせいぜいマイナス20℃くらいだから、放っておいてもそんなに害はないと思いますが、極地ではマイナス30℃や40℃は当たり前ですからね」

現在、MSRからはマイナス40℃でも硬化しないポンプカップやパッキンを使用した極地遠征用の「アークティックフューエルポンプ」がリリースされている。「まだ使ったことがない」という荻田も興味津々の様子だが、おそらく、それを使ったとしても、荻田は胸の内ポケットでの保温をやめはしないだろう。慎重に慎重を重ねる行動こそが生還のキー。経験を重ねた極地冒険家はそのことを熟知しているのだ。

実際、それを荻田に突きつけたのが、2007年に起きたテント火災だった。自らのちょっとしたミスからテントの一部が消失し、両手には大やけどを負って行動不能に陥った。幸いにもその日のうちに航空機によって救助されたが、それはいくつかの幸運が偶然重なった結果に過ぎず、文字通り、九死に一生を得たも同然。20年間の極地冒険行のなかで、荻田がもっとも危機的状況に陥った瞬間だった。

「夕食を食べ終わった時点で、翌朝のために燃料交換しようと、表のソリに積んでいた燃料ボトルをテントに持ち込みました。満タンのボトルは外気でキンキンに冷えているから、あたたかな水蒸気がこもったテント内に入れた途端、一瞬にして霜に

覆われます。その霜だらけのボトルを手にとって、キャップを開けて、中を確認しようとした瞬間、霜で手を滑らせてポンと落として、ドーンと一瞬で大火災。完全に自分のミスです。単純な話じゃないですか。火がついているときに、燃料ボトルを開けちゃダメだと。そんなことは頭ではわかっているつもりが、体がわかってなかったんです」

単独での極地遠征では、ほんのわずかなミスが致命傷につながる。だからこそ、一つひとつに手を抜かないことが大事だと荻田は肝に銘じている。今日は風がないからといって、テントの張り綱を数本省く。それでも問題は起きないのだが、そこで手を抜くと、なにかを理由に手を抜く癖がついてしまう。それが命取りになると荻田は言う。

「少しくらいならいいか……ということが、あれを機に一切なくなりました。実際、ストーブを点火するときは、ポンピングをしたら必ず音を聴いて、臭いをかいで、燃料漏れないことを確認してから火を付けています。どこでもいつでも、毎回欠かさず、です。いい経験でした。あのとき火災事故を起こしていなかったらと思うと逆に怖い。たぶん、もっと致命的な事故を起こしていたかもしれませんからね」

現在、荻田は小田急江ノ島線桜ヶ丘駅前で、「冒険研究所書店」を営みつつ、冒険に関するさまざまなイベントを主催している。また夏休みには小学生を集めて10日間かけて160kmを歩く「100マイルアドベンチャー」を続けている。冒険を通して社会や文化に貢献したいと願う荻田にとって、どちらもやるに値するチャレンジ。それらを続けながら、次なる冒険のプランを頭に描いているはずだ。

荻田泰永(おぎた やすなが)：1977年、神奈川県生まれ。徒歩による極地冒険行を20年で16回。世界的にも断トツの北極冒険歴を持つ冒険家。2018年、日本人初の南極点無補給単独徒步到達。同年、2017「植村直己冒険賞」受賞、著書『考える脚』(KADOKAWA刊)で第9回「梅棹忠夫 山と探検文学賞」受賞。現在、神奈川県大和市の小田急江ノ島線桜ヶ丘駅前に「冒険研究所書店」を開店。冒険界のハブとして各種イベントも開催している。

荻田泰永
冒険研究所書店



2007年、不注意から火災を起こしたテント。両手に大やけどを負って行動不能になり、嵐を防ぐテントも失われた。もしもプリザードの最中だったら……。もしも航空機が着陸できない乱氷帯での事故だったら……。生還できたのは幸運が重なった偶然に過ぎなかった。



2014年、FRP製のソリを引いて北極海を進む荻田。大きな落差の氷がひしめく乱氷帯では、1日で1kmも進めないことはザラ。氷の下は海で、氷の切れ目を泳いで渡ることもある。自撮りができるという時点で、ここはまだマシなほうだ。

雪洞14連泊にストーブは欠かせない

アラスカ中央部に位置するデナリは、標高6,190mの北米大陸最高峰。栗秋正寿は大学時代に山岳部の友人と登頂を果たし、そのわずか3年後には冬季デナリの単独登頂に成功した。かつて植村直己が消息を絶った、真冬のデナリにである。

夏期は世界中から多くの登山者を迎えるデナリも、冬季は挑戦者が極端に減る。栗秋の記録も冬季単独登頂としては世界で4人目。冬季登頂者全体でも9番目にあたる。

その理由は北極圏に近い高緯度の関係による、極度に過酷な気象条件にある。最大瞬間風速は秒速80m(時速288km)超で、気温はマイナス50℃を下回る。そんな条件下で登頂を勝ち取り、かつ無事に生還するのは至難の技だ。

真冬のデナリに弱冠25歳で単独登頂した栗秋は、その後はフォレイカーとハンターというアラスカ三山の2つの高峰での冬季登山に魅入られ、そこから毎冬のようにアラスカに通い込むことになる。

経験上、冬のアラスカ登山では行動できる日数の倍の停滞日が必要で、それが過酷すぎる気象条件から身を守る最良の方法だと栗秋は考えた。冬のデナリ登山には2週間の行動で4週間の停滞を要したから、デナリよりも少し難しいフォレイカーはトータルで9週間(約2ヶ月半)、最難関のハンターは12週間(約3ヶ月)の登山期間が必要と見積もった。

そうした長期戦の構えに加え、栗秋は気温と風速に応じた行動時間の制限を自分なりに定めた。基準よりも気温が低かったり、風が強かつたり、降雪直後で雪崩の危険があった場合は、たとえ

晴れた日でも潔く停滞を決めた。その結果、同じ場所での滞在泊数は、テント泊で最大17泊18日、雪洞泊では14泊15日に及んだ。いったん入山したら下山までに3ヵ月間を要し、ひとつの雪洞に10日間以上引きこもる。そんな登山を栗秋は20年近く繰り返してきたのだ。

それだけに、栗秋の登山は、この長期の停滞生活をどう過ごすかにかかっていた。そのなかで栗秋が選んだストーブは、MSR「ウイスバーライトインターナショナル」だった。

「大学山岳部時代は便利なガストーブが当たり前になっていたのですが、最初のデナリ登山に行く前に、現地の登山手引きを読んでみると、『デナリは夏でも上部はマイナス20℃以下になるので、缶のガスは気化しない場合がある。デナリ国立公園が推奨するのはホワイトガソリンストーブ』と書いてある。そこで、調べてみると、かなりの頻度でMSRが使われていると知って、アンカレッジに着いてから登山専門店でウイスバーライトを買いました。それからですね」

冬季のデナリに挑戦する頃には、レンジャーの勧めもあって、栗秋はウイスバーライトインターナショナルに切り替えている。ウイスバーライトと違ってマルチフューエル対応のため、灯油や無鉛ガソリンも使える。ホワイトガソリン以外の燃料が頭になかった栗秋には、その点での魅力はなかったが、不純物が少ないホワイトガソリンと違い、燃料によっては詰まりやすい

ために、太めのジェネレーターとフューエルラインが装備されていた。そこが栗秋にはひとつの中利だった。

「ドラゴンフライやシマーライト(旧モデル)を並行して使ったことがあります。私にはウイスバーライトインターナショナルがしっくりきました。音も静かですしね。なりより、五徳が低いから、鍋を置いたときに炎の位置が近い。この効率の良さが一番の理由です。またドラゴンフライほどではないにしろ、しっかり加圧すればなんとか弱火もつくれる。コンパクトに折りたためますし、構造がシンプルでフューエルラインが太いからメンテナンスもしやすい。私は週に1度のメンテナンスは欠かさなかつたので、その点でもメリットは大きかったです」

栗秋は冬のデナリに挑戦する前に、ある日本人登山家に会って話を聞いた。冬季デナリの挑戦者だったその登山家は、そのとき、さまざまな経験を栗秋に伝えた。そのなかに「トラブルがなくても、週一回のメンテナンスが大事で、これがMSRストーブを長く使うコツだ」という話があった。

栗秋はその教えを忠実に守るように、週に一回はテントや雪洞のなかでウイスバーライトインターナショナルを分解し、ジェットと呼ばれる燃料吹き出し口や、フューエルライン内部の掃除を欠かさなかった。この点で、前出の荻田泰永と大きく違うのが興味深い。遠征中にメンテナンスしたことがないという荻田の話を伝えると、栗秋はかなり驚いたようだった。それはそうだろう。

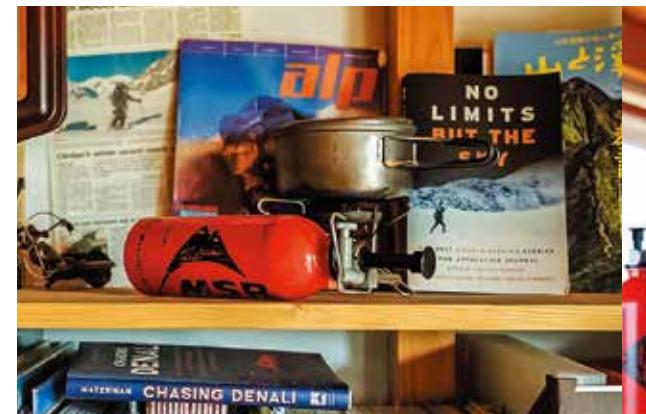
「ひょっとしたら、メンテナンスをしなくても、大きなトラブルがなかったのかもしれないということですね。では、私のあの時間はなんだっただのでしょう(笑)。でもまあ、実際のところ、単純な比較はできませんよね。メンテナンスしなかった遠征は一度もなかったので」

前提として考える必要があるのは、二人は使用モデルも使用環境も異なるということ。また、それ以上に違うのは、荻田は毎回遠征のたびに複数の新製品を買い求め、時間をかけてテストした後に遠征に持つて行った。それに対して、栗秋は同じストーブをメンテナンスしながら10年以上使い続けてきたこと。厳密にいえば、酷使によってワイアーレッグ(五徳足)のろう付け部が剥がれ、その部分を細い針金で巻いて修理しているが、燃焼系自体にトラブルは起きていない(※栗秋のウイスバーライトインターナショナルは旧モデルのため、五徳の形状が現行モデルとは異なる)。

「それでもストーブは全部で4個ほど持っています。レンジャーには『普通は予備を含めて2個だろ』と呆れられるのですが、登攀中にザックごと紛失する可能性がありますからね。それに備えて常に3個の予備を用意しているのですが、結局、トラブル知らずなので、気がつくと同じストーブを10年以上使っていて、予備として山に持ち上げたストーブは、毎回新品のまま持ち帰るということになります」



左:雲海を見下ろす切り立った稜線で雪洞を設営中のカット。装備の入ったザックを落とさないようアンカーで固定しているのがわかる。右:2010年、ハンター。イヤホンをスピーカー代わりにUSBサイズのラジオから音楽を鳴らして、雪洞での長い停滞日を楽しむ栗秋。ハーモニカを持ち込んで作曲に取り組んだこともある。



左:大半の登山装備はアラスカの友人宅に置いたままだが、ウイスバーライトインターナショナルを含めた一部のギアは持ち帰り、自宅にディスプレイしている。右:強面の登山家というイメージとは裏腹に、素顔の栗秋はピアノをよく愛する優しくおだやかな人柄。



栗秋は4つのストーブをベースキャンプ、取り付きのキャンプに一個ずつデボし、ひとつ前の前進キャンプに1個を置き、1個をザックに入れて持ち歩いて使った。そこまで念を入れたのは、クレバスに落ちて装備を半分失った経験があったからだった。それは1999年、自身3度目の冬のアラスカ三山、フォレイカー初挑戦時のことだった。

「クレバスに15mほど落ち、奇跡的にひどい打撲で済んだのです。そのときクレバスから脱出するために、荷物を半分処分する必要があった。その経験が大きかったんです。滑落で紛失するだけではなく、ちょっとしたケアレスミスで、ザックを1,000m下に落としてしまうことだってある。そこからストーブなしでは致命的です。私のアラスカ登山は、根本的に誰かに助けてもらえない状況にあることが大前提ですから」

栗秋が整備を続けながら使ってきたウィスバーライトインターナショナルには、これまで大きな故障は一度もないが、やはりフューエルポンプが凍ったことによるトラブルは起きている。2007年、冬季フォレイカーの単独初登頂に成功した直後のビバークだった。低温下の影響でポンプカップがスカスカ素通りして圧がかかるようになったのだ。

「これはまずいと思って、ポンプカップを温めたり、ポンプカップオイルを塗ったりしてみたんですがダメで、結局、予備で持ったポンプに取り替えて事なきを得ました。あのとき雪洞内はマイナス28℃。風は遮断していますが、最終キャンプに寝袋を置いてきたので、銀マットを敷いて着の身着のままビバーク

栗秋正寿(くりあきまさとし)：1972年、大分県生まれ、福岡市在住。大学時代に山岳部の友人とデナリに登頂。翌々年から冬のアラスカ三山に挑み続け、1998年、最年少でデナリ冬季単独登頂に成功。2007年、フォレイカー冬季単独初登頂。その後、ハンター冬季単独登頂を目指す。冬期アラスカ三山の挑戦はトータル20年以上、冬のアラスカ単独行はのべ846日間に及ぶ。2010年「植村直己冒険賞」受賞。近著に『山の旅人 冬季アラスカ単独行』(閉人堂)がある。

栗秋正寿
冒険家の反省ノート



です。それでも火が使えたおかげで、ラーメンやココアなど温かいものを取れてホントに助かった。ストーブが点火しなかつたらと思うとぞっとします」

栗秋の言うには、ちょうど前年のモデルチェンジで、ウィスバーライトインターナショナルのポンプカップが皮革製から樹脂製に変わっていたとのこと。それまでのポンプではトラブルは一切なかったため、極地冒険家のよう行動中は懐に入れて温めておくという習慣もない。けれども、これまでトラブルが起きていない皮革製のポンプカップを予備として持っていたことが功を奏したのだった。

「ストーブに限らず、それまで使っていた装備がモデルチェンジしたときには、必ず予備として今まで使っていたものをバーツとして持って行く。これが鉄則です。ごそり一式変えちゃったら、トラブルがあったときに対処できませんからね」

植村直己が消息を絶ち、世界的にも挑戦者が稀という過酷な冬のアラスカ三山で、栗秋は20年以上も生き抜いてきた。その理由は、細かいミスもおろそかにしないという反省と改良の積み重ねだ。遠征での反省点を記したメモは毎回100項目以上に及び、それが次の遠征に生かされてきた。

現在、その一部が「冒険家の反省ノート」としてウェブサイトで公開されている。それを読めば、栗秋がウィスバーライトインターナショナルをどう使いこなしてきたかがよくわかり、同時にその繊細で几帳面な人柄を理解できるはずだ。



2001年、フォレイカーの雪洞から、真正面に聳えるデナリを望む。雪洞マイスターの栗秋は、安全性や機能性を重視しつつも、どんな景色が見えるかで、雪洞の位置と向きを決めることがある。



2006年、デナリベースキャンプから見たフォレイカーのシルエットとオーロラ。この年はバリエーションルートのサウスバットレスからの冬季デナリ単独登頂を狙ったが、雪崩で装備の一部を失い3750m地点で敗退。

MSR LIQUID FUEL STOVE

ドラゴンフライ



前述の写真家・遠藤氏や、冒険家の荻田氏が北極圏で使用していたMSRを象徴する液体燃料ストーブのひとつ。革新的な二重バルブ設計により、トロ火から最大火力までを自在にコントロールできるのが最大の特徴です。煮込み料理から雪を溶かして水をつくることまで、あらゆる用途に使えるため、大人数のグループやガイドに愛用されています。ホワイトガソリン、無鉛ガソリン、灯油、軽油、ジェット燃料に対応するマルチフューエルタイプです。

収納サイズ: 180×120×90mm / 総重量: 578g / ゴトクサイズ: Φ190mm / ストーブ高: 100mm
使用可能燃料: DGジェット(出荷時)・ホワイトガソリン・無鉛ガソリン・DKジェット(付属)・灯油・軽油・ジェット燃料
¥30,800(税込)

MSR LIQUID FUEL STOVE

ウィスパー・ライトインターナショナル



世界中に愛用者を多く有するMSRを代表する製品のひとつです。前述の冒険家・栗秋氏が厳冬期のデナリにて使用していた液体燃料ストーブの定番で、火力が強く、静かな燃焼音が特徴です。ゴトクは直径が大きく、滑り止めがあるため鍋が安定します。また軽量で、ゴトクを折りたためばコンパクトに収納できることも強みといえます。ホワイトガソリン、無鉛ガソリン、灯油を燃料として使用できますが、灯油使用の場合は付属するUKジェットへの変更が必要です。

収納サイズ: 150×90×90mm / 総重量: 472g / ゴトクサイズ: Φ190mm / ストーブ高: 90mm
使用可能燃料: UGジェット(出荷時)・ホワイトガソリン・無鉛ガソリン・UKジェット(付属)・灯油
¥25,300(税込)



燃料ボトル

新旧すべてのMSR液体燃料ストーブに使用できるアルミ製の高品質な燃料ボトルです。

サイズ:
11oz - ¥3,850(税込)
20oz - ¥4,180(税込)
30oz - ¥4,620(税込)

スタンダード
フューエルポンプ

ウィスパー・ライトシリーズ、XKG EX、シマーライトストーブ(旧モデル)の燃料ボトル専用の燃料ポンプです。

¥8,470(税込)

ドラゴンフライ
フューエルポンプ

火力調整を自在におこなえるドラゴンフライ専用の燃料ポンプです。

¥8,470(税込)

アークティック
フューエルポンプ

マイナス40°Cでも硬化しないポンプカップやバッキンを使用した、極地遠征用のスタンダードフューエルポンプです。気温0°C以上では使用できません。

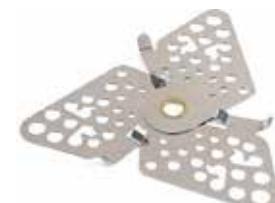
¥9,350(税込)

* フューエルポンプ本体は樹脂製のため、経年劣化します。安全のために定期的な点検をお願いします。



ヒートエクスチェンジャー

素早く水を沸騰させるなど、熱効率を高めるために鍋に巻きつけて使用するエクスチェンジャーです。
¥14,300(税込)



トリリウムストーブベース

雪や砂地、傾斜地などの不安定な場所でストーブを安定させます。3枚の羽は回転させてコンパクトに収納できます。
¥6,160(税込)



ヒートリフレクター・ウインドスクリーン

ストーブの下に数個リフレクターと、強風下でも安定した火力を得るためにウインドスクリーン(風防)のセットです。
¥3,740(税込)

アニユアル
メンテナンスキット

MSR液体燃料ストーブおよびポンプのメンテナンスキットです。Oリング、ジェット&ケーブルツール、潤滑剤など最低限のメンテナンスに必要なパーツを丈夫なキャリングケースに収納しました。
¥4,620(税込)

エクスペディションサービスキット
ウィスパー・ライト用

ウィスパー・ライトシリーズに対応するサービスキットです。(対応モデル: ウィスパー・ライト、ウィスパー・ライトインターナショナル(現行)、旧ウィスパー・ライトインターナショナル)
¥7,700(税込)

エクスペディションサービスキット
ドラゴンフライ用

ドラゴンフライに対応するサービスキットです。
¥7,700(税込)



液体燃料ストーブ 点火の儀式

写真 / 楠貝吉郎



ポンピング

ポンプがボトルにしっかりと取り付けられているか、コントロールバルブは閉じているか、燃料の漏れないかを確認後、フューエルラインをポンプへ挿入し留め金で接続します。その状態でポンプブランジャーからしっかりとした抵抗を感じられるまで、目安として20~30回ほどポンピングをします。



プレヒート①

液体燃料を効率的にガスへ変換するため、事前にジェネレーターを熱していきます。まずはポンプのコントロールバルブを少しだけ開け、スプーン1杯ほどの燃料がブライミングカップへ流し込まれたらバルブを閉めます。この適量を感覚として掴めるようにしましょう。



プレヒート②

実際にジェネレーターを熱していきます。ブライミングカップに溜まっている燃料へ着火します。その際、燃料が多すぎると炎がストーブ全体を包み込みますので、火傷に気をつけてください。その状態でも慌てずに見守りましょう。目的は燃料の通り道であるジェネレーターをしっかりと熱することです。



ストーブへ点火

目安として2分弱ほど、プレヒートの炎が小さくなつてきたら完全に消えてしまう前に再びポンプのバルブを半分ほど開きます。全体を包んでいた炎がゴトクの上部だけになれば点火完了です。もしプレヒートの炎が完全に消えてしまった場合は、バルブを開けて直接ゴトクへ点火することも可能です。



バルブ&ポンプ調整

プレヒート後の点火から10秒ほどすると安定した青い炎になります。その炎が消えてしまう前に、ゆっくりとコントロールバルブを開いて燃料を送り出します。好みの火力へと調整してください。また、燃料ボトル内の圧力が低下して炎が不安定にならないよう、再びポンピングをおこなう必要があります。



消化方法

消化方法はいたってシンプルです。まずコントロールバルブを閉じます。その後、数十秒ほど燃焼が続いたあとに炎は消えますが、実はガソリンの通り道であるフューエルラインにはかすかに燃料が残ります。ボトルを少し高く持ち上げるなどして、残燃料を燃やしきることをイメージしてください。

北国在住「灯油」愛用者からのレコメンド

文・写真 / 林 拓郎

2)ススが多い

着火初期はススがフィルム状になってクッカーにへばりつくほどだ。しっかりプレヒートし、調理などの使用は炎が安定してから。またメンテナンスにおいても、他の燃料を使用するよりも頻度を高めた方がよい。

3)これでもかのポンピング

これでよし、からさらにもうひと押し。燃料にかける圧力は高めのほうが燃焼は安定する。

というように、他の燃料と比べると少なからず手間とコツは必要になるが、安全でコスパは抜群。液体燃料には灯油という選択肢があることを、ぜひとも覚えておいてほしい。

灯油を使用するためには、燃料を噴射するジェットを専用モデルに変更する必要がある。ウイスバーライトインターナショナルであれば、付属のUKジェットへ入れ替えて使用する。



燃料ボトルをガソリンと共にすることは避けたい。
輪ゴムは真冬に手袋をした手で扱ったときに滑らないようにするために。



ダンボールならブライミングカップのラウンドに合わせて形を整えるのも簡単だ。



ブライミングカップに灯油を溜め、
ダンボールをしっかりと浸してからプレヒート開始。



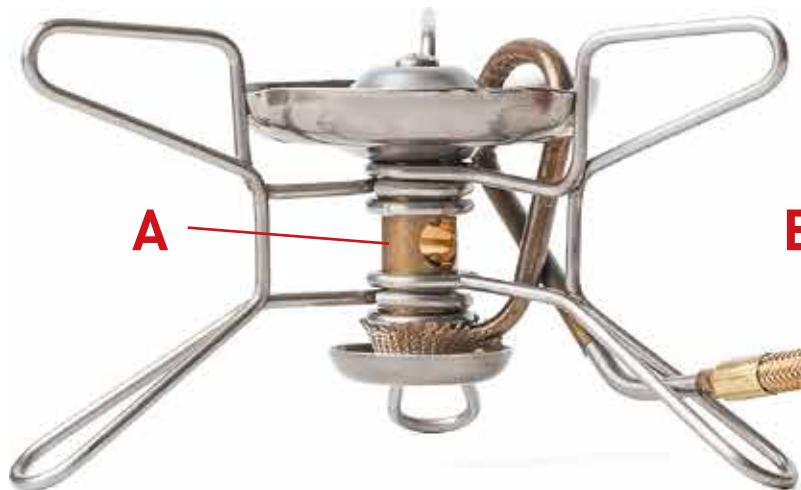
プレヒート中は火だるま状態になる。
可燃物からは距離をとり、風通しの良いところで。



液体燃料ストーブはメンテナンスが重要

写真 / 横貝吉郎

ストーブ各モデルごとのオーバーホール方法
フェューエルポンプのメンテナンス詳細などはこち
ら
[BACKCOUNTRY RESEARCH WEBSITE](#)



過酷な環境下においても活躍する液体燃料ストーブですが、

定期的にメンテナンスをおこなわなければ、火力低下や燃料漏れ、点火不良などを起こすこともあります。

基本的には各部のクリーニングと消耗品の交換によって回避できるトラブルなので、

定期的なメンテナンスをおこなってください。

A.汚れの根源になりうるジェットのメンテナンス



1 本体とフェューエルラインを分解してから、先端のジェットを付属品のジェット&ケーブルツールで緩めます。最後は指で回してジェットを外します。

2 ジェットを外すと中にシェイカーニードルが入っています。もしニードルの細い先端が変形していたり、折れている場合には交換が必要です。

3 ニードルに不具合がなければ、付属のジェットクリーニングワイヤーで穴に詰まった汚れを落としてください。ニードルの先端でも代用できます。

B.燃料の通り道となるラインのクリーニング



1 ジェット&ケーブルツールの穴を利用してカットケーブルを引き抜きます。汚れがひどく抜きづらい時は、ペンチを使用しケーブルを掴んで抜いてください。

2 カットケーブルをフェューエルラインからすべて引き抜いたら、汚れをウエス等で拭き取ります。汚れがひどい時にはバーツクリーナーも使用してください。

3 ジェットを取り外した状態で内部をバーツクリーナーでフラッシングしてください。ケーブルを戻す時は、約20回、13cmほど出し入れして内部を擦って汚れを落とします。

C.修理依頼のもっとも多いフェューエルポンプ



1 ポンププランジャーを外します。手順は矢印1の先端を写真の位置に合わせ、動かさないようにして矢印2の方向へ回転させます。プランジャーの固定が解除されたら、矢印3の方向へ抜きます。

2 先端に着いているポンプカップが破損・硬化していないか確認します。新しいポンプカップへ交換するしないに関わらず、ポンプ本体へ戻す前にポンプカップにオイルを注します。

3 コントロールバルブ内のOリングを確認する作業です。燃料調整つまみを反時計回りで緩めたら、ジェット&ケーブルツールを使ってつまみ付け根の真鍮部も反時計回りで緩めます。



4 取り外したコントロールバルブの付け根にあるOリングの劣化状態を調べます。交換する場合は安全ピンの先に引っかけて取り外してください。安全ピンの先端をペンチで曲げると効率的です。

5 フューエルラインの差し込み口にあるOリングの交換です。ジェット&ケーブルツールを使ってブッシングを外すと内部が見えます。Oリングを交換したらポンプカップオイルを少し注ぎます。

6 ディップチューブにクセが付き、ボトル内の燃料が少ない時にフィルター先端が上部の空気を吸ってしまうことがあります。その場合はチューブを抜き取り、下向きに差し込み直してください。



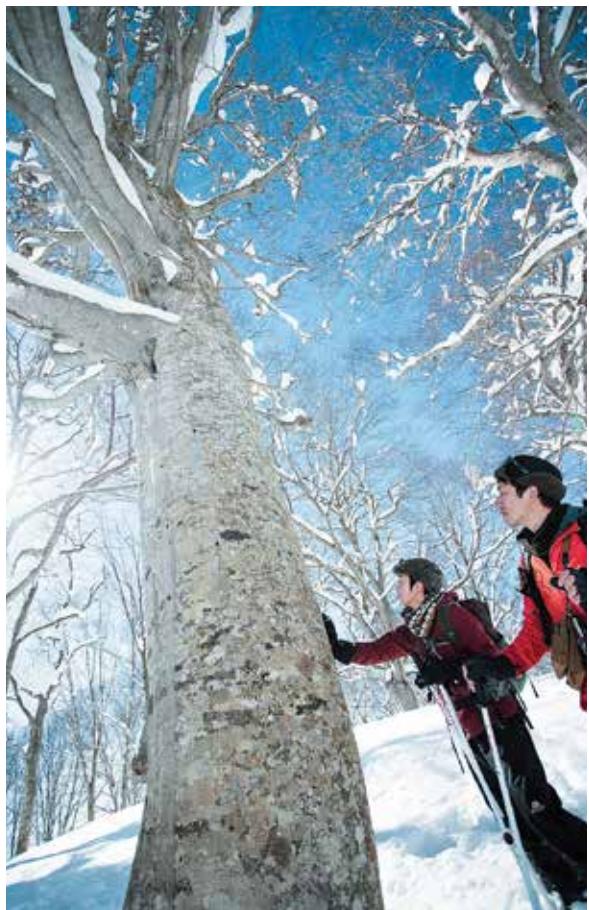
STORY 02

白い森を歩く

スノーシューイングで体現する優しい日常

文・写真 / 太田孝則

これまで使用していたMSRスノーシューの旧モデルから、
新しいモデル「EVO」へ履き替えて初めて歩いた鍋倉の森。
二人の使用フィーリングと共に、白い森で過ごした日常をレポートします。



「なべくら高原・森の家」の敷地内に広がるブナ林には、車椅子やベビーカーでも散策できる遊歩道が整備されており、積雪期にはそこが白銀のスノーシューコースに様変わりする。ウインターブーツやグローブなどのレンタルも充実しているので、誰でも気軽にスノーシューを体験することのできるフィールドだ。樹齢200年を超える巨木ブナとの触れ合いは、どこかノスタルジックでもあって、未来への道標のようである。



「うわー! 新しいのって軽いんだね!」

「こんなに履くのが簡単なら、本当に気軽に散歩できるね!」
MSRの新しいスノーシュー・EVOを初めて手にした二人から、まるで新しいおもちゃを買ってもらった子どものような無邪気な笑顔があふれた。

トモキさんとマイさんの小林夫妻が飯山に移住ってきて、5回目の冬のある日。二人は、「なべくら高原・森の家」からスノーシューを履き、厳冬期のブナの森の散策へと出かけた。森の家に勤める夫のトモキさんにとってスノーシューは業務の一環ではあるが、今日の様に、プライベートでも妻と森のデートを楽しむことが多いそうだ。また愛犬の日々の散歩も、冬は長靴+スノーシューという出立ちがスタンダードな暮らし。そんな二人にとって、スノーシューはもはや生活必需品となっていると言う。

歩き始めてかれこれ1時間が過ぎただろうか。聞こえるのはスノーシューが雪を踏みしめる音と、自分たちの呼吸音。そして、たまに木々の梢からサラサラと雪が落ちてくる音。それ以外は、まるでブナの森と深い雪がすべてを吸収してしまったかの様な静寂の世界が広がっていた。それは二人にとってはもはや憧れの世界ではなく、ごく普通な、日常の一コマだった。

「実は先に飯山に住みたいと言い出したのは私なんです」
妻のマイさんが少し恥ずかしそうに話してくれた。

「初めてこの森を訪れたのがちょうど今日のような冬の晴れ間で。その時見たこの森と雪の美しさに心を打たれてしまって、もう直感的にここに住みたい! って心に決めちゃったんです」



正直、除雪に追われる豪雪地での日々の生活は決して楽なものではない。だが、たまに訪れる今日のようなご褒美とも取れる時間は、いわばこの地に住む者の特権といえるだろう。その時間をこんなふうに肩肘張らずに楽しめるのが何よりの幸せだと二人はそろって笑う。

「今日だってただ新しいスノーシューを履いてお散歩してお弁当食べてコーヒー飲んだだけなんすけどね(笑)。別にすごい山に登るとか何か目的があるわけではないんだけど、無性に楽しいんですよ。こんな素晴らしい環境をずっと残していくって、初めてきた人たちにも同じように感動を味わって欲しいと思うんです。僕たちがそうだったようにね」

トモキさんによれば、ここ鍋倉の森にもかつては大規模なリゾート開発の計画があったそうだが、先人たちの故郷の森を守る

活動のおかげで、今ある里山の環境が守られたのだと言う。そんな先人たちの意思を受け継いでいくであろう彼らのような若者がいることに、勝手ながら無性に安堵し、そして誇らしく思うのである。スノーシューを履いて歩く冬の森は、ただただ静かで、ただただ美しかった。その無益ともいえる時間は、人を優しい気持ちにさせる何かがあるのかもしれない。

小林知規 / 舞衣：山小屋に勤務していた時代に出会った二人。共に生きていくべき場所を探す過程で、豪雪とその美しさに圧倒され「なべくら高原」のある飯山市へ移住。夫は森の家スタッフとして飯山の様々な魅力を伝えるべく奔走し、妻は畠仕事のかたわら動画制作なども手がけている。

「なべくら高原・森の家」

長野県飯山市最北部、標高500mのなべくら高原にある自然体験型宿泊施設。季節ごとの様々な体験プログラムを通して大人から子どもまで楽しむことができ、豪雪地の自然に触れることができる。www.nabekura.net



MSR
EVO



登りの少ない、比較的なだらかな地形でのスノーシュートレッキングに適したモデルです。耐久性に優れたEVOデッキに、着脱をより簡単におこなえる新しいバラグライド・バインディングを搭載し、さらに使いやすくなりました。また様々なシューズにフィットしやすい構造が気軽な使用を可能にします。バラグライド・バインディングの履き方は、まず赤いバックルタブを引いてストラップを緩めます。つま先が完全にトウストラップ先端に当たるまで足を入れたら、ストラップを前方へ引っ張り、つま先から甲までをしっかりとフィットさせます。最後にヒールストラップをスノーシューのテイル側に引っ張り、足全体を固定したら完了です。

サイズ: 21×56cm / 重量(ペア): 1.63kg
¥28,600(税込)

MSR
ダイナロックトレイルポール



2018-19シーズンに完全リニューアルを経たバックカントリー・ポール・シリーズの2節モデルです。長さの調整時や収納時に、ポールを簡単にしっかりとロックするダイナロックシステムは、道具を使用せずにテンションを変えることができます。そのためグローブを脱ぐことなく調整が可能になります。またそのロック部分のレバーは金属製のため耐久性に優れています。ポール自体もシンプルさと耐久性を兼ね備えた7075アルミ製で、調整可能な軽量ストラップは触り心地がよく、握りやすい仕様になっています。滑走以外でのスノーシューハイクや雪山トレッキングに最適なモデルといえます。夏用のバスケットも付属します。

サイズ: 105-140cm / 収納サイズ: 80cm / 重量(ペア): 592g
¥15,400(税込)



REPORT

MSR Backcountry Tour in Hakuba

ゲストが体験したフィールドでのギア比較

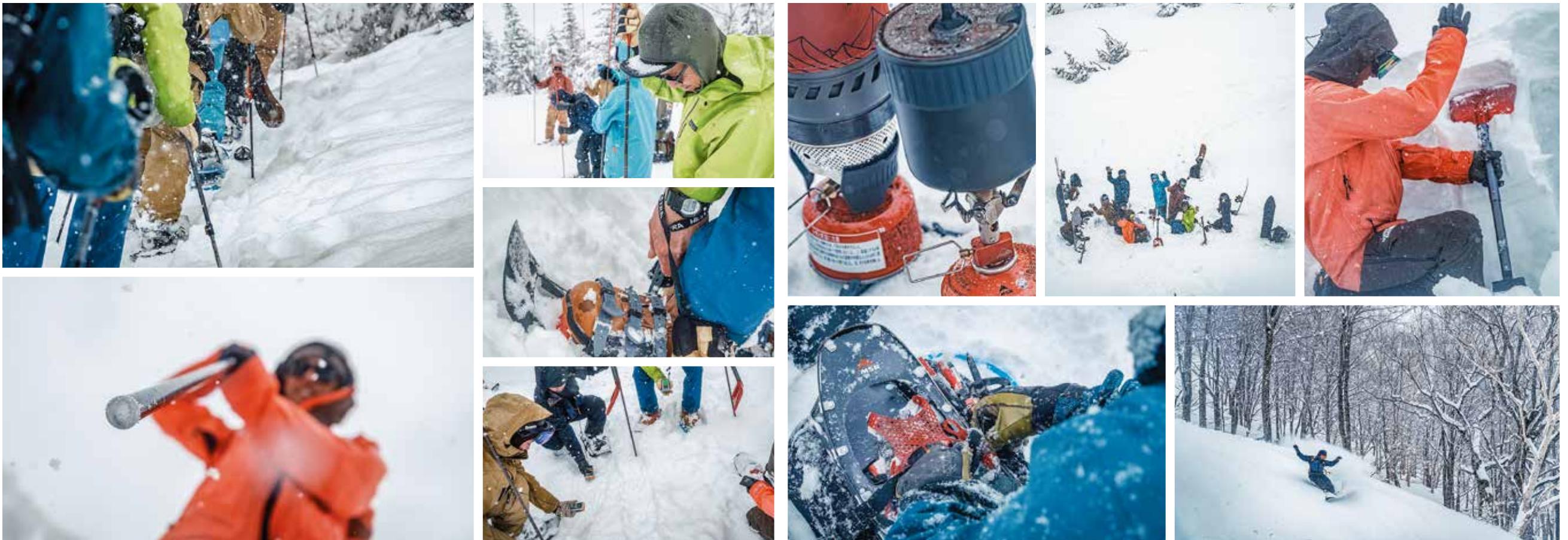
文 / 布施智基・写真 / 藤田一茂 (SNOWSURF HAKUBA)

MSRのアンバサダーでもある布施智基と藤田一茂。

二人のスノーボーダーが手掛けるバックカントリーのエントリー層を対象としたツアーで、
MSRなどのギアを使用比較してみました。ツアーのレポートと共に伝えします。



SNOWSURF HAKUBA:白馬をベースに活動するバックカントリーガイド・布施智基と、プロスノーボーダー藤田一茂が運営する、
BCツアーやセッションイベントなどを展開するカンパニー。雪と人を繋げ、自然と共生する人々の生き甲斐となる時間を創造している。



赤いジャケットのガイド・布施智基がレクチャーした今回のツアー。スノーシュー、プローブ、ピーコンなど、ゲストの皆さんにとって初めて手にするギアの使い方やその意味を、フィールドで体感できる有意義な時間となった。ちなみに最後のライディング写真はゲストの方です!

今回は、バックカントリー経験の浅い滑走者を対象にハードルを下げるツアーを開催した。ギアの使い方や山での所作など、山行のいろはをレクチャーしながら、ゲレンデから近い場所で、滑走はあくまでも移動手段として。そんな1日を過ごした。

ツアーをするうえで重要な天候だが、当日は春の嵐。3月後半というのに、しばらく降っていなかった斜面に20cmほど積雪し、ツアー中も終始雪が降り続くというコンディション。滑走メインのツアーであれば無理せず引き返すのが賢明だが、今回はこれを逆手に取れる内容だ。

雪が深々と積もったフィールドで、アバランチビーコンやショベル、プローブの使い方をトレーニングし、いざ雪山へハイクアップ。凍った春雪の上に20cmのドライパウダー。非常に歩きにくい雪質だ。凍った旧雪の表面と新しい雪の結合が悪いため、しっかりと踏み込まないと足が滑ってしまう。これは雪崩を誘発しやすいコンディションもあり、滑走中はもちろん、ハイク中でも注意が必要になる。そうして雪のコンディションをイメージしながら歩くのもバックカントリーでは大切な要素だ。

MSRのライトニングアッセントとEVOアッセント、二つのスノ-

シューを履き替えながらハイクアップを続ける。こうした機会でも設けないとなかなか体験できないことで、実際にその違いに驚かされる。歩きにくいコンディションがそれを明確にもする。ライトニングはしなやかで地形に合わせてフレームが追従し、そのフレーム自体が爪の役割をしているのでしっかりと地面に食いつくような感覚だ。一方、EVOアッセントは樹脂のボディに爪が付いているため、地形に対する追従性は劣るが、履きやすさとタフな設計は、アルパイン地形のハードなコンディションでも安心して使える。何よりコンパクトになるからバックパックに装着した時のフィット感は抜群だ。また、改めて個性的な違バインディングのフィット感も比較できた。

いざ滑走準備へとモードチェンジ。降雪で視界が悪く、雪面がよく見えない時は樹林帯を滑走する。一面真っ白な雪山では天気が悪いと陰影が出にくく、斜面の凹凸や斜度感がわかりにくい。木々を対象物として滑れば、それらを確認しやすくなる。3月後半にしては珍しいパウダーを滑走した後に、まともな休憩を初めて取った。そしてスノーソーとショベルを駆使して雪のテーブルと椅子を作る。参加者の大半が使用経験の

なかつたスノーソー。これも刃の種類によって切れ味がまったく違う。MSRとモチヅキ、それぞれのスノーソーの違いを体験してもらった。

MSRのベータソーはさまざまな機能が凝縮された薄く収納しやすい形状。細い木を切れたり、ポールの先端に括り付ければ手の届かない場所まで延長ができる。ビール瓶の栓抜きも付いているし、ガイド的には雪の結晶を測定する方眼があるのは利点だ。新潟県三条市で製造されているモチヅキのスノーソーは、匠の技術が刃に詰め込まれている。切れ味は素晴らしい。

そうした比較を楽しみながら作った雪のテーブルでお湯を沸かしてコーヒータイム。ここでもMSRのウインドバーナーとポケットロケット2を用いて、お湯が沸騰する時間の違いを比べてみた。やはり、ウインドバーナーの性能の高さに驚かされる。雪が降りしきるシチュエーションでスノーソーやストーブを使うことはなかなか体験できることではない。しかし、万が一雪山で遭難し、ビバークを求められる状況になった時にはこの経験が役に立つ。

あれこれと試しながら過ごした楽しい休憩もゆっくりはしていられない天候。人間の身体は一度冷えてしまうと温めるのに時間がかかる。雪山ではなるべく短時間の休憩が望ましい。再びスノーシューの違いを体験しながらハイクアップして最後の滑走へ。イメージに雪が崩れるコンディションだが、積雪はさほどでもないので危険ではない。けれど滑りづらい雪質での滑走となる。同行した藤田一茂による滑走レクチャーをおこないながら帰路へと就いた。

最初はどうなるか心配だった天候とコンディションだったが、かなり充実した内容の1日になったのは間違いない。自分自身がバックカントリーを始めた時に購入したのもMSRのスノーシューだった。相棒として様々な山へ登った。そしていま使い続けている。タフでシンプルな構造は、僻地へ行っても壊れないという信頼に繋がっている。これから数々のフィールドへ足を運ぶことになるであろうゲストの皆さんにとっても、良きギアを見つけ出すには素晴らしいテスト環境になったのではないだろうか。

SNOWSHOE

フラッグシップモデルの性能が顕著に



MSR ライトニングアッセント
Men's 22インチ モデル / サイズ: 20×56cm
重量(ペア): 1.84kg / ¥63,800(税込)

MSR EVOアッセント
サイズ: 21×56cm / 重量(ペア): 1.84kg
¥39,600(税込)

ライトニングアッセントとEVOアッセント。どちらもアルパインエリアで使用するスノーシューとしての機能は十分備わっているが、あらゆるコンディションの雪上を登るうえでは、ライトニングアッセントに分があったようだ。スノーシューを初めて履いたゲストの廣瀬裕貴さんの感想だ。

「EVOアッセントはたまに滑ったり、ズレてしまうことがあったんですけど、ライトニングアッセントは踏ん張ってくれるというか。より安心感がありました」

また、ライトニングアッセントの3ストラップモデルを所有しているゲスト山田文也さんも同様の感覚を抱いたそうだ。

「初めてEVOアッセントを使わせてもらいましたが、ちょっと横ずれする時がありました。構造によって違いが出るんですね。また現行のライトニングアッセントのバインディングが、あれほどストレスなくスムーズに着脱できるということに驚きました」

どちらのモデルがベストチョイスか? それは活動するフィールドによって変化するため一概に言い切ることは難しい。しかし、ライトニングアッセントがMSRスノーシューのフラッグシップモデルとして君臨している理由は、こうして使い比べることで自ずと明白になる。

SNOW SAW

切れ味の違いと目的の違いを実感



MSR ベータソー
山岳ガイドや救助隊、スノーサイエンティストのためのスノーソーです。
全長: 47cm / 刃渡り: 34.8cm / 重量: 180g / ¥13,200(税込)



TEPPA モチヅキ スノーソー
雪洞やベースキャンプを必要とする山行時に最適なスノーソーです。
全長: 47cm / 刃渡り: 34cm / 重量: 160g / ¥9,130(税込)

希有な比較となったので、まずは参加者が得た使用感からお伝えする。今回のツアーでスノーシューも人生初体験だったという渡辺瑞基さんの感想。

「MSRは細かく切れる。モチヅキスノーソーはザザッと切れる。スノーシューと同様に初めて手にした道具なので、わかったことは切れ味に違いがあるということだけです。ただどちらも綺麗に切れるのが印象的でした」

同じく初めてのスノーシューティークエストを果たした竹下皓貴さんは、雪を切り出してテーブルを作るという行為に感動したそうだ。

「双方とも、氷のような硬い雪に引っかかる感じもなくスムーズに切れ込みが入っていくんですね。その感覚が気持ち良かつたです。それを積み上げてテーブルにするという発想も初めてで、とても勉強になりました」

どちらのスノーソーも切れ味が抜群であることを体感されたお二人。本来であれば、モチヅキスノーソーは雪や氷のブロックを切り出す。MSRはピットチェックや木を切ったりなど安全面を切り拓く。という、ざっくりではあるがそれぞれ特化した一面を有しているので、目的や行動の違いによって使い分けることが理想なツールといえる。

BACKCOUNTRY POLE

ベテランほどエクスプローラーポールに傾倒している



MSR ダイナロックアッセントポール (L)
カーボン製の折りたたみ式で、軽量かつコンパクトな収納が可能。
収納が可能なモデルです。Sサイズ(100-120cm)の展開もあり。
サイズ: 120-140cm / 収納サイズ: 44cm / 重量(ペア): 496g / ¥30,800(税込)



MSR ダイナロックエクスプローラーポール
非常にシンプルな3セクション構造のポールです。
険しい冬のバックカントリーでの使用を想定したモデルです。
サイズ: 105-140cm / 収納サイズ: 63cm / 重量(ペア): 552g / ¥19,800(税込)

アッセントポールは軽量なカーボン製でコンパクトな収納が可能。一方、アルミ製のエクスプローラーポールは重量でも収納サイズでもアッセントには劣るが、構造がシンプルで手入れがしやすい。ベテランは、雪深い山奥での万が一に備えた選択をするケースが多い。

GAS STOVE

ウィンドバーナーが寒冷地で優れている理由



MSR ウィンドバーナー
パーソナルストーブシステム
専用ボットの下部がバーナーを覆い、
完全に閉じられた空間で燃焼するため、
熱をロスなくボットに伝えます。

サイズ: 11.5×10.7×18.1cm / 重量: 465g(ガスカートリッジを除く) / 付属品: 本体・1Lの鍋(断熱グリップ付き)・ボウル・蓋・バックタオル・キャニスター・スタンド
¥31,900(税込)



MSR ポケットロケット2
軽量でコンパクト。そのうえ高出力で高強度という、3シーズン使用や
ファスト&ライトのスタイルには最適なモデルです。
サイズ: 3.4×4.4×7.9cm
重量: 73g(ケース、ガスカートリッジを除く)
¥9,020(税込)

ストーブの出力は燃料タンク内の圧力に依存する。外気温が低い時や燃焼を継続していても圧力は下がる。レギュレーター(圧力調整器)を装備したウィンドバーナーは、非常に低い圧力レベルで最適に動作するよう設計されているため、一定の出力を確保できる。

スノーシューなどウィンター
ツールの詳細は[こちら](#)



モチヅキスノーソーTM
の詳細は[こちら](#)



ガストーブの
詳細は[こちら](#)



TOOL TOPICS #1

STORM アパレルケアキット



洗剤と撥水剤を一度に入れて洗濯できるワンウォッシュサイクルにより、時間と水を節約しながらウェア本来の機能を回復させ、長持ちさせるハードシェル用洗浄＆撥水キットです。フリースやアンダーウェアなどのクリーニングにも適応します。PFCフリーの地球に優しい洗剤です。

内容:アパレルウォッシュ225ml、
アパレルブルーファー225ml、計量カップ
¥2,090(税込)



長く使用し汚れが付着すると生地表面の撥水性は低下。そこから水分が染み込みます。



撥水性は新品へ近づくように蘇ります。透湿性も回復し、ウェア内の快適性も復活。

STORMアパレルケアキット

テクニカルウェアの洗濯方法などはこちら
<https://e-mot.co.jp/storm/apparel/>



STORM ダウンケアキット



ダウンウェア用の洗浄＆撥水キットです。基本的な使用方法はアパレルケアキットと同様ですが、ダウンウォッシュはダウンシラフなどダウン製品全般のクリーニングに適応します。もちろんPFCフリーの洗剤です。マイクロプラスチック汚染へ配慮し、容器をアルミボトルにしています。

内容:ダウンウォッシュ225ml、ダウンブルーファー225ml、
ドライヤーボール2個、計量カップ
¥2,750(税込)



皮脂や汚れで黒ずんだ表生地。湿気や埃を吸い込んでダウンのロフトも大幅ダウン。



汚れが落ちて生地の鮮やかなカラーが新品のように蘇った。ダウンのロフトも復元。

STORMダウンケアキット

ダウンウェアの洗濯方法などはこちら
<https://e-mot.co.jp/storm/down/>



洗濯必須なテクニカルアウターウェアの新時代

文 / 林 拓郎

ゴアテックスを製造するゴア社は、2024年内に環境負荷の懸念があるPFCを製品と製造工程から排除するという目標を掲げている。またバタゴニア社は2025年1月1日までに、すべてのアパレル製品をPFCフリー化することを宣言した。今や環境を鑑みたPFCフリー化は世界的な動き。PFCとはフッ素化合物の総称であり、そこには4,000種以上の物質が含まれる。その一部はC6と呼ばれるテクニカルアウターウェア用の撥水剤と、その加工に用いられてきた。しかしこの先、C6撥水剤はかなり少なくなるだろう。代わりに登場するのはPFCをまったく含んでいない、PFCフリーの撥水剤だ。

PFCフリーのメリットは環境への配慮がなされていること。しかし、その撥水性はC6ほど高くはない。さらに油をはじく撥油性に関してはほぼゼロ。PFCフリーの撥水剤は油汚れに弱いのだ。そして人間の汗には皮脂が含まれている。この皮脂が防水透湿メンブレンや生地の表面に残ると水を引き寄せ、浸水につながってしまう。だからこそPFCフリーが実現すると、こまめに油汚れを取り除く日常的なメンテナンスが不可欠になってくるのだ。

では具体的にどんなメンテナンスをするのかといえば、洗濯だ。PFCフリーの撥水剤を使ったウェアでは、目に見えない油汚れを洗い流すことが重要になってくる。それは現行のC6撥水剤を使ったものであっても同様だ。稀に「ゴアテックスは洗わないほうがいい」という声を聞くことがあるが、これは明確な間違い。ゴアテックスに限らず、他の防水透湿素材も、洗濯程度でパフォーマンスが劣化するようなことは起こり得ない。むしろ数年も洗わないでいると、防水透湿素材に付いた皮脂が酸化して機能劣化や内部剥離を招くこともある。つまりC6であろうとPFCフリーであろうと、ウェアにとって汚れは大敵。早いうちに洗い落とした方がいいことは間違いない。

個人的な頻度でいえばスノーウェアの場合、真冬なら5~6回の使用に一度、汗を大量にかくハードな山行や汚れが付きやすい春先などは2~3回ごとに洗っている。それでも、以下に挙げるようなコツを守っていれば、製品の劣化を感じることはない。

扱い方はメーカー指定に準ずる／ウェブサイトや洗濯表示をよく見て、指示された洗濯方法を理解する。

洗剤はアウトドアウエア用が望ましい／一般衣料用洗剤を使う場合は、洗剤を入れ過ぎないように。漂白剤や柔軟剤は使用厳禁。

よくすぐ／洗剤成分が残っていると浸水につながってしまう。すぎぎは念入りに。

また、撥水性を維持するためには洗濯して干した後に加熱することが重要となる。実は撥水性は、生地表面の細かな毛羽が水滴を弾くことで発揮される。汚れはこの毛羽をベタッと寝かせ、洗濯と熱処理はふわっと仕上げることに繋がる。加熱は乾燥機にかけてもいいし、あて布をして低温のアイロンをあててもいいが、具体的な方法については各ウェアメーカーの指示に従うことが肝心だ。

それでも撥水性が不足するようなときには、アウトドアウエア用の撥水剤で処理することをオススメする。新品状態へ戻すことには難しいかもしれないが、ウェアのコンディションによってはかなりの効果が期待できるはずだ。

ここで紹介するSTORMアパレルウォッシュは、PFCフリー製品を含む、多くのテクニカルアウターウェアをターゲットに開発されている。使い方は洗濯槽にアパレルウォッシュを入れ、撥水剤のアパレルブルーファーを柔軟剤用投入口に注いで、普段通りに洗うだけ。最大のメリットはこの手軽さにある。洗濯のたびに撥水処理を繰り返すので、洗濯と撥水をワンサイクルでカバーし、低下した撥水性を補うことが可能になるのだ。

やがて主流になるであろうPFCフリー製品は、ユーザーの手によるこまめなメンテナンスが欠かせなくなる。STORMはそうした新しいフェーズを見据えて開発された、次世代のメンテナンスキットといえる。

TOOL TOPICS #2



A THERMAREST

**ネオエアー
Xサーモ NXT**

最高クラスの断熱性へアップデート

マットレス内部にはさみ込んだ熱反射板・サーマキャプチャーをこれまでの4枚から5枚へと増加させ、断熱性を表すR値は6.9から7.3まで上昇しました。ボトムからの冷えをシャットアウトしてくれるアップデートです。北極圏や南極への冒険にも選ばれる究極のアイテム。寒冷地を目指すプレイヤーにとっては、唯一無二の最高選択です。

レギュラーサイズ / サイズ:51×183cm
収納サイズ:23×11cm / 重量:439g / R値:7.3 / 厚さ:7.6cm
¥44,000(税込)

B UCO GEAR

サバイバルマッチ

サバイバル野郎の必需品!

突風が吹いても、水に浸かっても、このサバイバルマッチは12秒ほど燃え続けるというタフさです。過酷な環境下でも外的要因になびくことなく、自らの役目を淡々と果たすその様は、まさに憧れの熟達アウトドアマン、究極のサバイバル野郎です。憧れの存在へ近づくための第一歩は格好から。密封性の高い防水コンテナ付きですよ!

サイズ:5.4cm
収納サイズ:62×Φ30mm / 重量:15g
¥880(税込)

C platypus

ビッグジップEVO

スマートな水分補給で体力温存を

雪上での行動中、水分補給の度にパックから水筒を取り出すのは意外と大変です。このシステムなら標高の高い稜線上を登っていても、無駄な所作なく、ひと呼吸ついでにひと口の水分。スマートですよね。またソフトボトルは氷嚢や湯たんぽにも代用できるので、雪深い奥地での行動時にはエマージェンシーとしても重宝します。

サイズ:22×38cm / 重量:171g
容量:2.0L(他1.5L, 3.0Lもあり)
¥6,820(税込)

D YUKIWA

**カーブドイスキーボトル
200ml**

厳冬期を謳歌する山男の嗜みに

マイナス15℃を下回るような冬の晴れ日。フードの無いチャアリフトに乗っていると冷たい風が否忲無しに頬を刺す。隣に座っている先輩はジャケットの内ポケットに手を忍ばせ、「やるかあ?」とこのボトルを差し出してきた。無骨なヒゲ面の優しい会津訛り。中身は強烈な度数のスピリッツ。雪山を遊びつくす大人の嗜み。沁みました。

サイズ:120×70×25mm
重量:225g
¥11,550(税込)

E SEALINE

Eケース

アレもコレも水濡れから守ってくれます

スマートフォンやGPS、タブレットなどの繊細な電子機器はもちろん、クルマのキーやバラツキがちな小物たちまで、すべてを水濡れから守ってくれるシンプルなケースです。もちろん透明な窓の上からでもタッチスクリーン操作は可能。開口部の防水シールロック・ジッパーのおかげで、深さ1mで30分間の浸水テストをクリア済みです。

M size / サイズ:15.5×20.5cm / サイズ展開:S-XL / 重量:43g
カラー:ヘザードグレー、ヘザードグリーン、ヘザードブルー
¥5,170(税込)

F MSR

**ローダウン
リモートストーブアダプター**

登山家料理人になれるかも!?

カートリッジ直結型のウインドバーナーやポケットロケット2を、分離型にするアクセサリー。雪上や不整地などでも低く安定した状態で使用できるため、ソロでの使用が大半だったウインドバーナーでも、オプションの専用ボットやスキレットを使用してグループストーブとして使用可能。僻地でも大人数料理ができるなんてクールです。

重量:180g
¥8,800(税込)

STORY 03

スノーボーディングと マウンテニアリングの境界線

文・写真 / 原田 岳

「雪山滑走」とひと言で表しても、人それぞれの向き合い方や楽しみ方がある。

「流派」が違うのだ。山奥でその流派の違いを痛感することになった

スノーボードフォトグラファーの体験談。

本誌とWEBの双方でお届けします。



小屋の奥に見える大きな岩のピークが地蔵岳。その基部を右に巻いてピーク稜線に出るのだが、そこは風の通り道で会話もままならない。この先はいつも自分越えの場所でもある。

装備が違えばアプローチも違う

この景色を見るのは何度目だろうか。滑りたい斜面はすぐそこにあるのに、ドロップポイントまで行かせてもらえない。ヒリヒリした空気の中、ロープで確保しないかぎり行く気になれない様な場所に僕らは立っていた。

しっかりとしたマウンテニアリングの装備で臨めばサクッと行ける場所。でも、撮影のために滑りのパフォーマンスを優先した軽装備の僕らにとってはただの行き止まり。ドロップポイントはその難関の先にある。毎年のように自分越えを果たして少しづつ核心部へ近づいてきたけれど、やっぱりこの先はダメなのか。隣にいるスノーボーダーの吉田勇童はそんな顔をしていた。「ハーネスにロープ、ついでにアクセス…」と嘆い現実を呑みしめつつ、スノーシューの刃がしっかりと掛かっているのを確かめながら、荷物をデボした八海山八つ峰の最初のピーク、地蔵岳の基部まで戻った。「当初の予定通り、南面を滑り落としてからトラバースして、さっき引き返したポイントまで登り返すことによう」。その提案にクルーも納得してくれた。

実はこの日、二人の先行者がいた。足跡を見るかぎりスキーとスプリットボード。行き止まり、地蔵岳の基部へ戻るまでは同じ動きをしていたようだ。ところが、そこからのラインが見当たらない。「どこへ行ったんだ?」と不思議には思ったが、吉田ともう一人のスノーボーダー橋本貴興は、すでに目の前に広がるこれから滑り込む斜面の確認に集中していた。スノーボーダーにとっては魅力でしかない沢地形の続く斜面を堪能してから、ロックバンドをトラバースして登り返す。そうすれば本来の目的地であるドロップポイントへ到達できる。一見すると遠回り

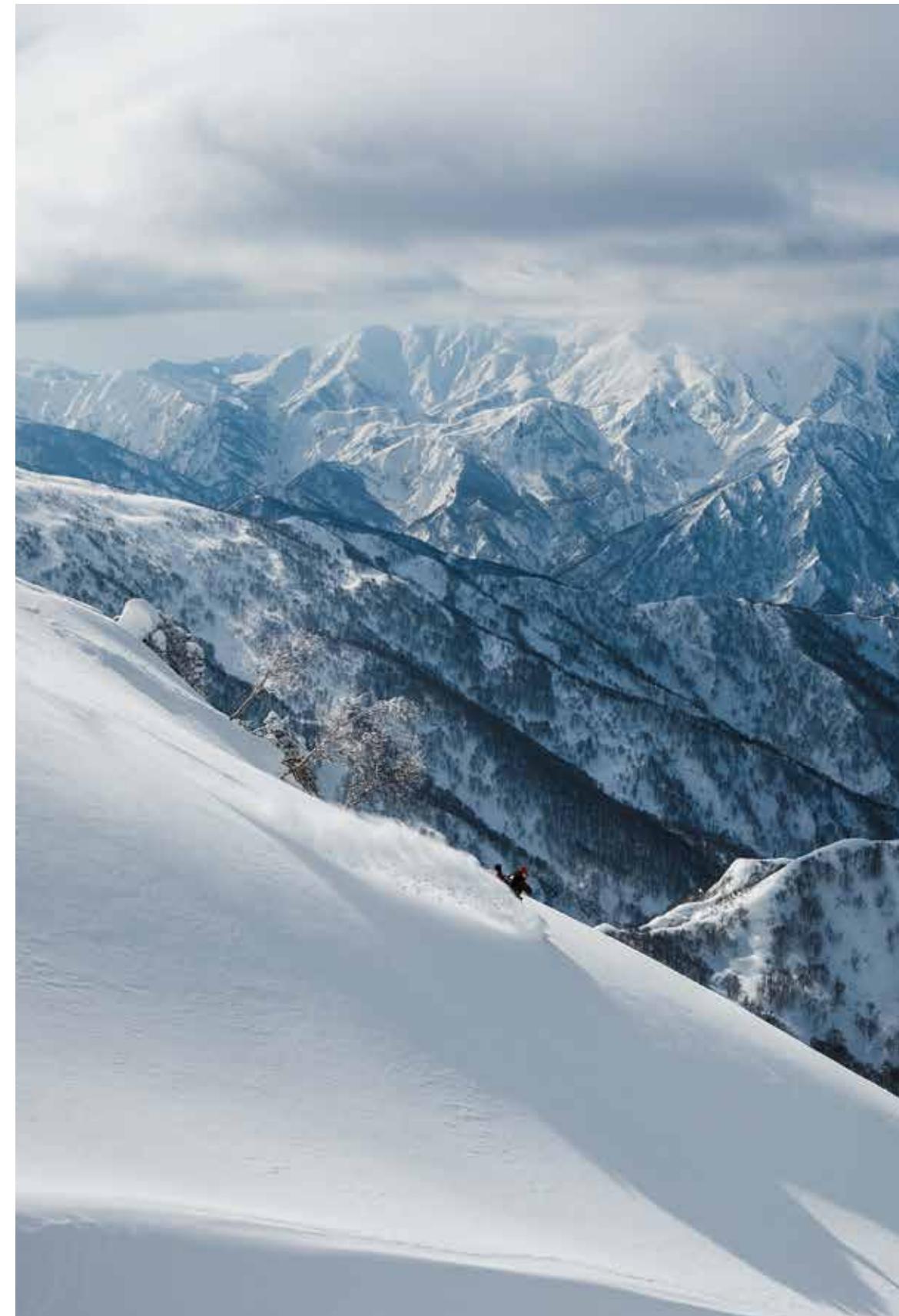
のようだが、安全面においても、目前の誘惑に従うためにも、僕らにとっての最善ルートといえるだろう。

撮影準備をしていると、僕らの滑る斜面よりもずっとレフト側に、ロックバンド直下へ向かって急斜面をクライムダウンしているツボ足の跡を見発した。おそらくロックバンドの基部を巻き、引き返した場所を超えてドロップポイントへ向かったのだろう。迷いなくその足跡は続いている。「目的地は一緒だろうから、このトラックを追いかければ、少しは楽に……」いやいや、そんな思考は危ない。先行者のラインは八海山における冬山縦走のルート。となれば、僕らとは装備が違うはずだ。装備が違えばアプローチも違うということを忘れちゃいけない。僕らはこの日狙っていた斜面を見つけてしまった日からずっと、最幸のライディングをするためにスノーシューとポールだけでどうアプローチし、どのように安全に滑り降りるかを考えてきた。そのための理想的な装備とルートもプランしてきている。だからもともとクライムダウンするという発想はない。山や滑走に対するスタイルの違いとでもいうのか、そこにははつきりとしたスノーボーディングとマウンテニアリングの境界線があるということを、足跡を見発した時に改めて学んだ。

これは雪山における多様性であって、どちらが正しいということではない。ただ、この日はすべてにおいて先行されていた。最終出口のルートまで、ずっと近くにトラックが見え隠れするという状況。吉田は終始そのトラックを見続けながら、マウンテニアリングへのリスクと共に、嫉妬心にも似た感情を抱いたのだろう。どこか腑に落ちないとでもいうのか、悔しいというのか、煮え切らない表情は翌日まで消えることがなかった。

原田 岳(はらだ がく)：ルーツは東京下町戸越エリアの写心家。現在は長野北信をベースに日本国内を愛犬のホワイトシェバード“シャカ”と共に東奔西走し写心活動を続ける人見知りで利き目は左の fotographa。作品集に『Make Peace Lab.』がある。

MORE DEEP STORY
BACKCOUNTRY RESEARCH WEBSITE



橋本の滑るライダースレフト側にロックバンドの樹林帯がある。そこに先行者の歩いた跡が見える。ライト側にはロックバンドを回り込んで滑れる長い尾根が気持ちよさそうに手招きしている。標高は下げるが、僕らは気持ちのいい尾根ーランを選択した。



魚沼口コの吉田とは、この場所を様々な場所からのアプローチで模索してきた。この日の滑走を終えて麓でゆっくりしていると、集落のおじさんが夕陽を撮影するために訪れた。
「あんたたちかー、南面の岩の下滑ったの。すげー横切ってたなー」。双眼鏡を首からぶら下げたおじさんは嬉しそうに会話を続けた。
「たまにこっち側に滑って降りてくる人いるけど、あそこ横切ったのは、あんたたちが初めてだ」